

KPO北京レポート

KPO北京事務所 崔 万哲

Tel: +86-10-8454-9400 Fax: +86-10-6282-7371

E-mail: cuiwanzhe2001@126.com / cuiwanzhe2001@hotmail.com

1. トピックス

■ 10年以内に中国は高所得国の仲間入り

モルガン・スタンレー中国チーフエコノミストの邢自強氏は、このほど成都で開催された経済会議で、消費、イノベーション、デレバレッジは中国が高所得国に向かってまい進する新たな原動力になるとの見方を示した。そして、10年以内に中国は高所得国になり、1人当たりの所得が世界銀行に定義される1万3000ドルという高基準に達するという核心的な結論を出したと明らかにした。中国新聞網が伝えた。

同氏によると、消費のグレードアップ、特に地方都市に潜んでいる巨大な消費潜在力は、中国経済の発展を押し進める主な原動力になり、中国の投資方向が絶えずにイノベーションや研究開発を原動力とする方向へと転換することによって今後、中国には世界市場をリードする大手企業が続々と現れる見通しだという。

2. フライトスケジュール

■ 北京発 — 関空着 (週)

就航期間	便名	日本着曜日	現地発時間	日本着時間	経由	備考	フライト時間
180101-180131	CA927	月火水木金土日	0840	1240		NH5722(S)	3:00
180101-180131	MU525	月火水木金土日	1010	1400		JL5676(S)	2:50
180101-180131	MU277	月 水 土	0915	1530	YNT	JL5656(S) YNT-KIX間のみ	5:15
180101-180131	ZH9055	月火水木金土日	1335	1720		NH6604(S)CA3355(S)	2:45
180101-180131	NH980	月火水木金土日	1430	1820		CA6655(S)ZH3215(S)	2:50
180101-180131	CA161	月火水木金土日	1605	2010		NH5724(S)	3:05

出所：関西国際空港

3. 現地の観光情報

■ インドが中国人の旅行目的地になることを希望

インドのアニル・クマール・ラーイ駐上海総領事は、このほど開催されたPRイベントでインドが中国人の旅行目的地の一つになることを希望していると語った。

インドの統計によると、2017年1～11月、インドを訪れた外国人観光客は前年同期比18.1%増で、うち、米国、英国、フランス、ドイツ、日本、中国からが大半。電子ビザのおかげで、年初以来、電子ビザを利用してインドに渡航した外国人観光客数は前年同期比67.3%増となった。(新華社)

■ 「健康と観光の融合」に大きな発展の余地

中国国家旅游局の杜江・副局長はこのほど、2020年に中国の観光業と健康サービス業の規模はそれぞれ7兆元と8兆元に達する見込みで、「健康と観光の融合」には大きな発展の余地があると語った。

中国観光市場にとって、「健康と観光の融合」には巨大な市場の潜在力と社会的な価値が潜んでいる。「健康と観光の融合」は既に観光と健康の二つの異なるニーズを満たす新たな方式となりつつある。(北京日報)

■ [中国人大学生友好交流団]が訪日へ

11月28日から12月4日の間、[中国人大学生友好交流団]一行251人が東京、和歌山、山口などを訪問した。期間中、防災講座を受講したり、伝統文化を体感したりと広く日本社会に接した。また、日本人大学生らとも交流した。

代表団のメンバーは吉林省、陝西省、山東省の大学で学ぶ大学生で構成され、日中友好会館の招きで訪日。(中日友好協会)

4. クローズアップ

■[シェア自転車]

先日、出張先の南京で、忘れ物をしたため大学のキャンパスに戻らなければならなかった。歩くにはちょっと遠く、かといってタクシーを拾う距離でもなかった。そこで登場するのは、いまやホットで爆発的に拡大しているシェア自転車。実に便利なものだ。

2016年の夏から秋頃にかけて、シェア自転車は急速に北京や上海などの大都市間に広まり、強い存在感を示している。最も有名なものは車体がオレンジ色のMobike(摩拜單車)、同じく黄色色のofo(共享单车)だが、17年春までの間に20社以上のベンチャー企業がシェア自転車ビジネス事業に乗り出しているという。

「中国版シェア自転車」の特徴は専用の自転車置き場ではなく、従来から自転車やバイクを置いている区域ならば、どこでも乗り降り自由、スマホで決済するだけで利用できる簡便さだ。使い方は、まずスマホにシェア自転車用のアプリを導入する。利用したいときにGPSでどこにシェア自転車があるかを検索すれば瞬時に見つけられる。一番近い場所にある自転車の元に行き、アプリで自転車のQRコードを読み取り、ロックを解除する。乗り捨てるときにはアプリの「終了」ボタンを押せば自動的に再びロックがかかり、その場で決済すればいい。

料金体系は企業によって異なるが、例えばMobikeの場合、最初の利用時に200元のデポジットを支払い、1時間乗ってわずか1元という安さ。一度アプリを導入すると、毎日のようにさまざまなクーポンやお知らせが流れてきて、料金が無料になるものなどもある。ネット通販最大手のアリババによる決済システム・アリペイ(支付宝)や、8億人以上が使用しているともいわれるウィーチャットペイ(微信支付)などで支払い、登録した銀行口座から自動引き落としされる。

2000年代になって中国のモータリゼーションは劇的に進化し、マイカーを持つことがステータスとなった。だが、マイカーの増加などが原因で激しい交通渋滞や環境汚染が深刻となった。

そこに現れたのがシェア自転車だった。これまでの地下鉄、バス、タクシー、自動車といった市民の交通手段に、ひとつ“新たな選択肢”が増えた形だ。

シェア自転車は外出の[最後の1キロ]問題を効果的に解消した。この革新的な見どころは、海外ユーザーにも認められているようだ。

中国発のシェア自転車は、いまやシンガポール、ロシア、日本などの海外へも上陸し、その勢いはとどまるところを知らない。

(以上)